

「情報処理」第29巻 第11号別刷 昭和63年11月発行

情 報 革 命

田 中 英 彦

 社団法人 情報処理学会

巻頭言



情報革命

田中英彦†



現在の教育期間は長い。大学院を出るまで、通常18年、博士までなら21年、幼稚園や社内教育を含めると更に3~4年加わる。その間、社会生活を営むための基本能力、教養、専門知識・方法を身につけることになっている。30歳近くになってようやく一人前という訳で、お肌の曲り角はとっくに越え体力も落ち始めての巣立ちである。社内の何々教育、課長研修等を加え、日々の雑誌購読等を加えれば、もはや「学習だらけ」。われわれは正に学習の時代にいたのである。

情報技術の進歩は、種々の情報を得るための時間的・距離的な制約を取り除きつつある。どこに居ても、自分の求める情報をすぐ得ることのできる日は近い。そこで重要な技術は情報辞書/ディレクトリの技術である。原情報が膨大になる結果、ディレクトリも膨大となるため、ディレクトリのディレクトリや、本命情報をサーベイした何々流見方情報が重要となる。しかし、重要さを見極める作業こそ正に知的な作業であってそう易々と機械化し難い問題であるし、またそうあって欲しくない。更に、あらゆる人に等しく情報アクセスの機会が与えられるとすれば、オープンされていないより本質的で本音の情報を求めて人との直接接合が重要視され、他人と差を付けるのはその道の重要人物との交遊網の広さという昔ながらの結果になり勝ちであろう。

あらゆる情報が手軽に入手できる結果、研究を職とする者の中にも大きな影響が現れて来つつある。ここ数年来の研究を眺めればいわゆるブームがやって来ては収まるというパターンがいかにも多いことか。LAN, AI, マルチメディア, ワークステーション, 超電導, ファジィ論理, ニューロネット等々。研究者というのは世の動きに煩わされず、一人静かに知的探究をやる等とは大違い、ミニスカートを隣が穿けば自分も穿かないと流行遅れになるのでそそくさと準備する。しかし、怒濤のごとく一群の研究者が同一目的に向かう

結果、種々の性質が短期間で明らかになるというメリットもあるし、これらの流行が現在に求められているものを示しているとも考えられよう。とは言え、常に膨大な情報を常に見ておらねばならないという負担は大変なもので、下手するとその作業だけで毎日が過ぎて行きかねない。

産業革命が人力による労働からの解放であるならば、情報革命は情報取得の距離的・時間的制約及び、苛酷な知的労働からの解放であろう。単純な知的労働を機械に置き換え、速度や量からみた頭脳の限界を打ち破ることが今までに行われてきたコンピュータ化である。この置き換えは完了したというには程遠く、未だ残された分野が多いし、第一そのためのソフトウェア作成は大変な知的労働である。あらゆる状況を頭に入れて100%誤りなしにプログラムを作るなどというのは土台、人間に得意な作業ではない。

こう見てくると現代の情報化は知的労働からの解放どころではなく、知的労働の強化である。こざっぱりとしたオフィス内に居る(人もいる?)とは言え、その労働の苛酷さは産業革命前の肉体労働とあまり変わるところはないのではなからうか。

情報の時代を真の情報革命とするためには、より容易で高度な成果を生む知的生産の手法と、その知的産物を蓄積し要求機能に合わせて取り出し組み合わせて利用するためのシステムが必要である。人の歴史ではそれを「書物」によって行ってきた。今、われわれの求めるものはそれに代わるシステムである。コンピュータ、メモリ、通信という要素を組み合わせ、過去の知的産物を将来に伝え、容易に利用可能とする体系を作り上げなければならない。そして、情報の入手に踊らされ厳しい心的緊張にさらされる日々から解放されて、落ち着いた知的生産の毎日を過ごすことができるよう、その体系を社会に組み込む方法論を構築する必要がある。われわれ情報技術者に課せられた課題は正にそのような技術ではなからうか。

(昭和63年9月21日)

† 本会理事 東京大学工学部電気工学科